

「マーケットの浅読み・深読み」

発行・編集:FXニュースレター

執筆担当:斎藤登美夫



◆◆◆ No.0540 ◆◆◆

19/07/03

【 7月 は「動くか動かないか両極端」、2ヵ月連続小動きも!? 】

経験則からみて、「動くか動かないか、両極端になりやすい」――6月相場だったが、結局今年は「動かない」まま終了となった。月末にかけては「アリバイ工作」的な乱高下で、一見動いたようにみえたものの、月間を通した変動幅はわずか2.02円。これは4月の同1.61円に次ぐ、今年2番目の月間小変動になる。そんな6月相場を受けた、足もと7月相場は果たしてどうなるのか。恒例となっている過去の経験則を参考に考えてみると、「夏枯れ」という言葉があるように、夏場の取引は減退傾向。6月に続けて「動くか動かないか、両極端になりやすい」ようだ。果たして、前月の反動ともいえる「荒れた7月相場」を期待したいところだが、早くも2ヵ月連続の小動きを予想する諦めムードも漂っている。

◎株価は米株中心に上昇傾向、ただ為替との連関性低い

7月相場について、まずは星取表を見てみると、1990年以降昨年までの29年間で16勝13敗となっている。若干ドル高が有利ではあるものの、ほぼ互角の数字であり、どちらかに大きく偏っているわけではないようだ。

視点を為替ではなく株価、それも米株に移すと、「サマーラリー(夏の株高)」という言葉があるように、NYダウなどは夏場に上昇しやすいという傾向がある。そうした「夏の株高」の反動が秋に来ることが多いわけで、実際にブラックマンデーなど過去の暴落の多くが10月に集中、「悪魔の棲む10月」などと言われていることはよく知られていると思う。ともかく、7月に「米株の上昇」が見込まれるのであれば、為替と株価の動きは連動することも少なくことから、「ドル高・円安」に動いても本来不思議はないのだが、何故か7月は当てはまらないことがままある。仮に、米株高などが進展したとしても、それにとまなうドル買い・円売りの動きは限定的、別のものとして捉えた方がよいのかもしれない。

いずれにしても、動く方向性としては大きな特徴がうかがえなかった7月相場だが、別の観点から見た場合、ひとつ興味深い事象がうかがえる。それは、参加者が徐々にサマーバカンス入りするため流動性が乏しくなることもあってか、過去の7月相場は「動くか動かないか比較的極端な値動きをたどることが多い」――ことだろう。

たとえば、比較的最近の事例をみても、2012-14年の3年間は「動かない」というパターンだったのだが、1年空けた2016年と2017年は逆に「動く」パターンをたどっていることがみてとれる。今年が前記した2つのパターンのどちらをたどるのかは「神のみぞ知る」ところ。しかし、相場を取り巻く環境、平たく言えば材料を参考にする、7月は日本で参院選が実施され、それが終わったあとには、トランプ米大統領が「選挙後まで待つ」と指摘した「日米貿易交渉」がいよいよ待たなしとなる。月末にかけては、一気に日米間の貿易問題が噴出、為替に対する言及なども否定出来ず、相場も荒れ模様――などという展開をたどらないとも限らないように思っている。

なお、最後にニュースの観点から過去の7月を見ると、「米国の通貨が『ドル』に決定(1785年)」をはじめ「リラ暴落でイタリア市場が一時閉鎖(1985年)」など、為替に関する興味深い事象が少なくないほか、「米国の英国からの独立を宣言(1776年)」や「ウォーターゲート事件でニクソン大統領の弾劾可決(1974年)」、「ロッキード事件で田中前首相逮捕(1976年)」など、世界の歴史的に重要な出来事が相次いでいた。もちろん、こうしたことは毎年確実に起こるということではないものの、今年の世界情勢を振り返ると前者はともかく後者については、何が起こっても不思議はないだろう。飽くまでリスク要因ながら、頭の片隅にでもしっかりとどめておきたいところだ。(了)



当レターは、情報提供のみを目的としたものです。内容に関して正確であるよう注意を払っておりますが、その正確性を保証することはできません。投資や運用にあたっての最終的な判断は、あくまで読者自身の責任と判断によって、ご利用いただくようお願い申し上げます。また、本稿の無断転載・転送もご遠慮ください。

なお、本稿に関する問い合わせは『FXニュースレター』までお願い致します。

